まえがき

本報告書は、UU3S プロジェクトの４年の活動記録をまとめたものです。UU3S とは、Utsunomiya University Students, SDGs, Solution（宇大生 SDGs 解決）の略称です。気候危機、海洋プラスチック、少子高齢化、多発する災害など、数多くの問題が複雑に絡みあうグローバル・地域の課題に対して、「パートナーシップ」を通じて「自立・分散型の社会」を推し進め、複数の問題を「同時解決」することを目指すものです。

なぜ学生、若者たちが声をあげ主体的に動くこと、そして若者たちの声を吸い上げていくことが重要なのでしょうか。環境問題がプラネタリーバウンダリーを超えている、と数々の科学者たちが指摘しています。その問題は、金融危機、テロ、ナショナリズムなども誘発し、システミックリスクを引き起こしている、と指摘するのは、ジャック・アタリです。こうした問題から“逃げきれない”次世代の若者をエンパワーメントし、問題群の解決を目指すことが、今まさに問われているのです。

問題群の解決にはどのような視点が必要なのでしょうか。日本では、環境問題解決のために個人の努力や我慢が求められがちです。しかし国際社会では、環境か経済かという従前のゼロサムゲーム的な二元論から「ポジティブサムゲーム」へと転換する物語として、持続可能な発展やエコロジー的近代化が提唱されてきました。リオ宣言、SDGs、パリ協定もこの方向にあります。社会的な環境イノベーションの重要性は、今日、実に多くの方々が語るところとなっています。本プロジェクトの研究においても、誰かに犠牲を強いることがないようなエネルギー効率改善や再エネの既存技術で、地域を豊かにする脱炭素社会の形成は可能だと明らかにされてきました。

しかし、そうした技術は放っておいても普及するわけではありません。必要なのは社会的な環境イノベーションです。「政治的」な意思に支えられた「スマートな規制」を要すると論じるのは、エコロジー的近代化論創始者の一人であるイエニッケです。スマートな規制、「経済的インセンティブ」、「戦略的なプランニング」と「目標設定」が組み合わされていること。「オープン」で「フレキシブル」な「対話」が営まれ、その中のアクターたちは全ての「関連ステークホルダー」が包摂され、ネットワーク化され「水平的／垂直的な政策統合」を支持していること。このような条件が揃って、社会的な環境イノベーションが起きるといいます。

言い換えると、脱炭素・循環型社会へ持続可能な方法で移行（トランジション）するには、単純な「手段論的」解決策などはありません。人々の認識を変えるほど難しいものはありません。極めて困難です。だからこそ、「エコロジー的再構築」を目指す政治、マルチレベル、マルチアクター・ガバナンスが極めて重要とされるのです。上述のイエニッケは、「マルチレベル・ガバナンスは、抵抗力のある汚染者に対して圧力をかける機会を数多く提供する」といいます。政府でも民間企業でもない、多様なステークホルダーが関与する重要性がここで強調されています。多層多様な関係性こそが社会イノベーションの鍵です。

このような考え方は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターが目指すところと、通底しています。ドイツ人社会学者ハーバマスは「多様な意見を集約して合意を形成する場としての公共圏」を提唱しました。ハーバマスの定義に準えて、同センターは、「グローバルな課題の解決のために、国家の枠を越えて多様な活動と文化を持つ市民・市民組織を含めた市民社会が活動する公共圏」を「多文化公共圏」と呼びました。「多文化公共圏」は議論・合意形成の場であり、それは世界中どこにでも存在する空間です。

こうした背景から、UU3S プロジェクトでは、多くのステークホルダーとパートナーシップを醸成させていただき、多文化公共圏をいくつも創設しながら、幸せな脱炭素・循環型社会への持続可能な移行に向けて、多層での対話と活動を繰り広げてきました。

本報告書の第Ⅰ部では、その４年間の活動記録を年度毎にまとめました。第２部では、プロジェクト活動の中で社会的に評価された二つの受賞作品を並べました。最後に、ずっと一緒に歩んでくださった NPO うつのみや環境行動フォーラムの皆様からのコメントも頂戴しました。本報告書が、社会的な環境イノベーションの足がかりになりますことを祈念しています。

2024 年 3 月

宇都宮大学峰キャンパスにて

国際学部教授　高橋若菜